次ページへ続く

Continued on next page...

凱香園文庫の浄瑠璃正本について

関西大学図書館には「凱香園文庫」と呼ばれるコレクションが収蔵されている。昭和三十四年度の購入で、浄瑠璃正本類約四五〇冊、歌書・注釈書類三六〇冊に謡曲百番を併せた九〇〇冊を超えるコレクションである。先般担当者はこの中の浄瑠璃正本類を調査する機会を得た。以下に記すのはこれについての若干の報告である。

一

関西大学図書館で和書を閲覧した人なら、その中に「凱香園文庫」と刷りこんだ蔵書票や題簽紙を貼ったものがあることに気づかれるだろう。蔵書票は表紙見返し上部中央に貼付されている。紅梅白梅をあしらった色刷りの小型和紙で、やや縦長の長方形の右上端に洋数字の番号がナンバリングで打たれており、下端に左横書きで「凱香園文庫」とある。また表紙右上端には「凱香園蔵書」の洋紙ラベルが貼られてあり、これには蔵書分類番号と思われる数字と、購入年月日・価格が横書きの洋数字で記入されている。ただし価格は必ずしも記入されてはいない。購入時期は昭和十年代が多いように見受けられた。題簽紙は白地短冊型和紙に朱の匡郭、上端に同色で「凱香園文庫」と右横書きに印刷されたもので、力強い几帳面な楷書で外題が書かれている。凱香園主人の筆であろう。原題簽を残す本も少くはないが、それ以外の本にはほとんどすべてこの題簽紙が表紙中央に貼られている。やや疲れの見える表紙にこの題簽紙を貼ったものもあるが、凱香園主人は傷んだ表紙は新しい表紙に替えたものと見え、替表紙には疲れのない、同じ紙質・同じ藍色の新品が多い。替表紙に原題簽を丁寧に貼り移した場合もかなりあるが、これが凱香園主人の手によるか、それ以前の所蔵者によるものかは、ケース・バイ・ケースで一概には推定できない。

さて、右に仮りに凱香園主人と呼んだ旧蔵者は、本名梶並暉一氏。所謂「農村歌舞伎」の盛んだった岡山県勝田郡勝田町出身で、昭和十三年まで岡山県下の警察署長を勤め、昭和三十一年に六十六歳で歿した人である。若い時から文学に親しみ、同郷の友人である劇作家額田六福らと同人雑誌を作ったこともある。あららぎ派の短歌、特に赤彦に傾倒していたということであるが、後年歌書を蒐集するようになったのは、こうした短歌との因縁によるのかもしれない。夢二の絵もよく集め、そのコレクションは夢二美術館に収められていると聞く。浄瑠璃正本の蒐集は昭和初年からであった。警察を退職後岡山市内でみずから古書店を開業、

戦災に遭ったがまた別の場所に店を開いた。これは収入のためより書を愛したためであり、また蒐集の便があるからだったとのことである。現存するコレクションが戦災を免れたのは、郷里に疎開しておいたためであろう。体軀堂々、性豪放磊落と伝えられるが、一面丹念で几帳面でもあったという。子息訓生（みちお）氏は東京大学文学部美学美術史学科を卒業、山陽放送・ノートルダム清心女子大学等で活躍しておられたが、数年前他界された。

関西大学図書館には梶並暉一氏発行の小冊子『凱香園瑠璃銘鑑（がいかえるりめいかん）』（昭和十年三月）がある。この冊子題名の振仮名によって文庫名を「がいかえんぶんこ」と読むことを知ったのであるが、これは当時知られていた浄瑠璃外題を五十音別に配列した名寄せで、約九〇〇曲を九十頁にわたって手書きし、謄写印刷したものである。各外題には初演年代、太夫名または作者名、翻刻書名を示し、古浄瑠璃については、かなりの作品の梗概を書き添えたものである。巻頭言には、「ほんの二、三十部」を印刷したとあるが、その目的は蒐集にあった。既に購入済みの作品の上には筆軸で朱の丸印を押し、この印のない丸本を「御所蔵御発見、御在庫相成候はゞ御通知願上候」と記されている。以て蒐集の熱意を察しうるが、その上驚くことには、これ以前既に「手製やら活版やらで、四、五回計り」簡略な名寄せを作って同好者や古書肆に配っているのである。「又々本春の照会用として」作ったというこの冊子も、同じような所へ配られたのであろう。

これ以後梶並氏が「銘鑑」の改訂版を作ったかどうかはわからない。しかし、巻頭言の中で同氏は「一年一年訂正増補を行ふて完全な全浄るりの年表が出来上ることを私は考へて楽しんでゐます」と書いている。研究の便宜にも時間にも恵まれなかったであろう一愛好家のこの努力と抱負には打たれるものがある。また本書の巻末には、名寄せ中の誤字・脱字の正誤表もつけてある。けだし氏は豪放磊落の反面、きまじめな努力の人だったのであろう。関西大学図書館に収められたこの文庫の浄瑠璃正本類は前記のごとく四五〇冊に上り、この名寄せではまだ朱の丸印が押されていなかった多くの正本が、その後の努力によって氏の架蔵に帰していたことがわかるのである。

二

凱香園文庫の存在は、古くは若月保治氏によって学界に紹介されていた。『人形浄瑠璃史研究』巻末の「諸文庫蔵浄瑠璃本目録」には、「凱香園文庫蔵本」として「祇園の御本地」以下七本の古浄瑠璃が掲げられている。しかし、このうち関西大学図書館に現存するのは左の三本のみである。

阿弥陀仏四十八願記　本屋平兵衛版
阿弥陀四十八願記　鶴屋喜右衛門版
阿弥陀胸割　鱗形屋孫兵衛版

他の四本中「祇園の御本地」は横山重氏に貸与され、『古浄瑠璃正本集第五』に梶並暉一氏蔵「祇園の御本地ㅐ山ほこの次第」として翻刻された。「すがわらのしん王」は横山重氏のノートに記録され、『金平浄瑠璃正本集第一』の「すがはらのしん王（仮題）」の解題中に、このノートによ

り梶並暉一氏蔵本のあったことが紹介記述されている。他の二本「あいこの若」「動稚高麗責」も横山重氏によって調査されていたのではないかと思われるが、その所在はわからない。なお『国書総目録』に梶並暉一蔵として登録されているのは、右七本のうち「祇園の御本地ㅠ山ほこの次第」と「すがわらのしん王」だけである。

他方、これら古浄瑠璃七本以外の大型の正本群は『国書総目録』に登録されなかった。巻末の文庫一覧にも「凱香園文庫」の名は見えない。無論関西大学図書館蔵本としても載っていないのである。もっとも、昭和三十五年刊『近松浄瑠璃本奥書集成』(大阪府立図書館発行)は関大図書館収蔵後に調査した結果を記載しているが、その範囲は近松関係諸本に限られていた。

そこで本稿では、関西大学図書館蔵凱香園文庫正本群の中から若干の本を採り上げて、簡単な紹介と考察を試みることにした。もとより新発見資料というものではなく、二十年前から公開されて来たものばかりである。ここに採り上げる諸本も研究者には既に知られているはずであるが、こうした形の報告・紹介にも多少の意義なしとしないであろう。

三

まず近松本の一本の奥書から始める。

○おふさ徳兵衛重井筒

替表紙。替題簽。内題「おふさ徳兵衛重井筒」。内題下に「近松門左衛門作」。六行三十四丁。鱗形屋孫兵衛・伝法屋吉九郎版。問題の奥書には「右語り本の通り正本にうつし畢ぬ節墨譜は和歌より出て発声甲乙の秘密を受伝へたる竹本の末葉に至りたれ共猶おのれ〳〵かふし付の心いきは其人によりて知るへし秘事はまつ毛とやかしく」という識語があり、その左、書肆名の右、大型壺印の上部の縦約九糎・横約三糎のスペースを切抜き、裏から白紙を貼ってその穴をふさいだ上に、「竹本義太夫」と小字で印刷した小さな紙片を貼りつけてある。正本近松全集別巻一『近松浄瑠璃奥書集覧』一四六頁に写真が掲出されているから就いて見られたい。

その写真に添えられた解説は、「元来この奥書は竹本染太夫の語り物を出版した伝法屋版に見られ、壺印の上に『竹本義太夫遺弟　竹本染太夫』など(其他の型も)あったのを、壺印を残して削ったものである。義太夫名の貼紙は、この奥書から取ったかと思われる」と記すが、この伝法屋版染太夫本奥書の様式は「いろは蔵三組盃」(安永二年)、「塩飽七島稚陣取」(安永五年)、「日本歌竹取物語」(安永六年)、「往古曽根崎村噂」(安永七年)等の伝法屋版正本によっても確認されるところで、それらの奥書の竹本染太夫署名の右肩に小字で印刷されている「竹本義太夫遺弟」の七文字から「竹本義太夫」の五文字を切抜いて貼ったと解説者が言われるのも、的確な推定である。

しかし『集覧』一四五頁には右の写真から「竹本義太夫」を削除した修正写真が掲げられており、その解説には、この五文字を「貼らぬのが元の姿と考える」との記述がある。『近松浄瑠璃本奥書集成』もこの凱香園文庫本の奥書の写真から「竹本義太夫」を削除した修正写真を掲げ、その状態を〔奥書二十八〕の様式としていた(その写真を熟視すると識語

と書肆名との間に細い縦線が見えるのは、前述した切貼りの線が残ったものであろう)。これも「竹本義太夫」の貼紙のある状態を出版時の姿でないと見た結果取られた処置だったと推測される。しかし、既に『集覧』解説に明らかなように、この奥書は全体として伝法屋版染太夫本奥書の様式に属し、その様式の板木で印刷したものである。とすれば、伝法屋が「重井筒」の六行本を板行するに際して、鱗形屋と相版で出した染太夫本――例えば「塩飽七島稚陣取」――の奥書の板木には改刻の手を加えず、その板木で印刷した後に署名部分を切抜き、紙を貼って発売し、その際、近松本らしい体裁を整えるために、版元自身が「竹本義太夫」の名を貼付したのではあるまいか。なぜなら、この五文字の筆蹟がまさしく伝法屋版染太夫本奥書のものであることは『集覧』解説の言われる通りであるから、義太夫名の貼付が購入者ないし所蔵者の手業だとすると、彼は他の染太夫本の一本を犠牲にして、その奥書から切抜いたことになるからである。

なお、本書の刊行は伝法屋吉九郎が初代竹本染太夫通称伝法屋源七の語り本を刊行していた安永年間か、それよりやや後れる時期であろう。

四

次に『義太夫年表』の補足となるような事項を報告する。

○譽報春住吉

凱香園文庫には内題を「譽報春住吉」とし、本文・刊記を等しくする二本がある。一本は題簽に「報譽殿下茶屋　薩摩座／石渡利助版」とあるもの(以下甲本と呼ぶ)、他の一本は題簽に「譽報春住吉　薩摩座／上総屋利兵衛版」とあるもの(以下乙本と呼ぶ)である。わたくしは『義太夫年表』の寛政年間を担当したので、本作について寛政八年正月の項で、数種の正本に基づいて四次の上演を推定した。

1　譽報春住吉　　大坂　豊竹此太夫芝居
2　譽報春住吉　　江戸　薩摩座
3　報譽殿下茶屋　江戸　薩摩座
4　報譽殿下茶屋　江戸　肥前座

しかし、その際不明にして右甲乙二本の存在を知らなかったので、ここで補足を兼ねて紹介しておくことにする。

甲本は表紙見返しに太夫役割を有し、奥書に「座本　豊竹栄治郎」の署名と佐々井治郎右衛門・西宮新六・鱗形屋孫兵衛の書肆名を記す。しかるに豊竹栄治郎が座本を勤めるのは大坂大西芝居において寛政五年の一年間のみであるから、寛政八年正月の刊記と矛盾する。さらに太夫役割を見ると、これは寛政五年三月大坂大西芝居(座本豊竹栄治郎)上演の「太平鳴戸の船諷」(松竹図書館蔵本)表紙見返しの太夫役割と一致する。しかも奥書もまたこの正本と一致するのであって、本書は原題簽を有するにもかかわらず、表紙見返しと奥書とは「太平鳴戸の船諷」正本のものだったのである。故意によるものか、補修の際の手違いによるものか、今のわたくしには判断しえないが、この甲本はその題簽によって『年表』に3の上演時刊行とした石渡利助版正本(演劇博物館蔵)と同版の一本と見て矛盾はない。

乙本は『年表』で2の上演時刊行と考えたかづさや惣兵衛売出しの正本（芸大図書館蔵）と題簽を同じくするが、奥書を異にする。かづさや本は、『年表』に記したように佐々井・鱗形屋版奥書をそのまま流用しつつ、その書肆名の上に貼紙して「書林江戸ばし四日市　かづさや惣兵衛」が発行することを示したものであって、薩摩座上演の際に奥書の書肆名改刻を略して急遽出版したものと見られる。これに対して乙本は、奥書に「名代　薩摩小平太／座元　竹本折太夫」の署名と「江戸日本橋四日市広小路　上総屋利兵衛版」の書肆名を有し、題簽と併せて見ると、薩摩座上演時刊行の正本としての形式を整えていることがわかる。しかし、残念ながら本書の刊行時期を推定することができない。手掛りになるかと思われるのは、内題下に埋木された「鶴沢駒吉」の署名である（管見に入った限りでは「讐報春住吉」の他の諸本は内題下が空白）。しかし薩摩座に関する資料が乏しいため、鶴沢駒吉の同座出勤の傍証が得られない。そこで現段階では、『年表』に推定した四次の上演以外にも、或る座で上演された可能性があるということを補足するにとどめざるをえない。

○下総国累説と粧水絹川堤

「下総国累説」は替表紙、替題簽、内題「下総国累説」。七行五十丁。刊記「于時明和五戊子歳七月十五日　作者　東勇助」。奥書欠。この書名の正本は他に所在を知らない。『外題年鑑』（寛政版）の読本浄瑠璃の部に安永八年亥八月刊とする「下総国かさね説」（『近世邦楽年表』『義太夫年表』ともに正本未見とし、後者は詳細は不明としながらも、一応安永八年の条に掲げて後考に俟つ旨を記す）は、あるいはこれと関係があるのかもしれないが、しかし凱香園文庫本「下総国累説」は読本浄瑠璃ではない。実は刊記を同じくし奥書に「豊竹此太夫」の署名を持つ五十丁本の「正保四年粧水絹川堤」（菊屋七郎兵衛・松本平助・天満屋安兵衛版。関大図書館蔵。ただし凱香園文庫本ではない）の改題本である。内題の「下総国累説」は埋木改刻に成り、板外丁付は「絹川　壱」～「絹川五十畢」で右の「粧水絹川堤」に一致する。改題本であるから、刊行は刊記の年月（明和五年七月）より後となるが、奥書を欠くのが惜しまれる。

なお、凱香園文庫には前記五十丁本とは別版の「正保四年粧水絹川堤」五十一丁本がある。内題下に「座本幾竹島吉」の署名があり、刊記は「于時明和五戊子歳相月中五日　作者　東勇助」（傍点引用者）。鱗形屋孫兵衛・森川豊助版で、奥書にも「座本幾竹島吉」の署名（但し埋木）があるから、『義太夫年表』明和五年七月の条に掲げる京都大学図書館蔵本と同版であろう。京大本は未見であるが、凱香園文庫本で見る限り内題下の「幾竹島吉」の四字は埋木の疑がある。とすれば、原五十一丁本刊行は明和五年七月十五日であるが、凱香園文庫本そのものの刊行は再演の時かもしれない。もし京大本もそうだとすれば、『年表』に明和五年七月十五日初日の興行を幾竹島吉座とするのは再考を要することになる。『年表』記事に掲げる絵尽しでは、幾竹島吉座の興行が「明和五年九月吉日」となっていることを考慮すると、座本名が埋木の五十一丁本なら、この九月上演に合わせた刊行であった可能性も出て来る。そう考えられるとすれば、『年表』が一抹の疑念を残した正本刊記と絵尽しの日付との異同は説明できるわけである。

もっとも、この考えに立っても問題は残る。『外題年鑑』（安永版）に「明和五年子年二月十五日 あみた池門前座本幾竹島吉」、『浄瑠璃大系図』竹本春太夫条に「子二月十五日北堀江阿弥陀池門前座本幾竹春吉太夫幾竹島太夫両名櫓下にて粧水絹川堤」（傍点引用者）、同じく豊竹源太夫条にも同年二月同座本とあるが、これらとの関係は理解しがたい。しかし、互に別版である五十丁本と五十一丁本とが刊記の日付を等しくする（「七月十五日」と「相月中五日」）から、初演の劇場はともかく、初演の日付を七月十五日とした『年表』の処置は妥当と思う。

なお、『年表』によれば千葉胤男氏蔵松本平助・天満屋安兵衛版「粧水絹川堤」の刊記には「七月十五日」とある由。とすれば版元と刊記から見て五十丁本系統の一本であろうと推測する（正本未見）。

○北浜名物黒船噺と雙紋筐巣籠

二種の正本が一冊に合綴されたケースの一例である。原題簽「北浜名物黒船噺／半兵衛雙紋筐巣籠」と二行に記し、その下に「豊竹駒太夫／豊竹此太夫／豊竹鐘太夫／正本［　］」とある（ただし太夫名は辛うじて判読）。内題と刊記はそれぞれの初めと終りに「北浜名物黒船噺」「明和六年己丑七月十二日　作者菅専助」「半兵衛雙紋筐巣籠」「明和六年己丑七月廿八日　作者　菅専助／中邑阿契」とある（内題下署名はどちらも「座本豊竹此吉」）。前者は七行六十六丁、後者は七行三十一丁。奥書は巻末に一箇所で豊竹駒太夫・豊竹此太夫・豊竹鐘太夫の署名があり、書肆名は破れて見えないが「大阪日本橋北丁三丁目」とあるから、題簽と照合して正本屋小兵衛と推定される。

この二作の合綴本は天理図書館にもあり（替題簽。奥書欠）、『義太夫年表』によれば千葉胤男氏蔵本にもあるという。七月二十八日よりの同時上演に合わせて発行した合綴本であるが、『年表』の記事に掲げた後者の正本は奥書を欠くので、『年表』の補注というような意味で紹介しておく。

五

最後に、比較的稀本に属するもの数点を報告する。奥書については、同じものが『近松浄瑠璃本奥書集成』に見える時はその番号で示す。

○愛宕山あさひの峯

原表紙。原題簽「あたご山旭峯」。ただし題簽は上三分の二にのみ文字が残り、下部は文字が消えかけた上から重ね書きの筆を加えたかと思われる。内題「愛宕山あさひの峯」。内題下に「太夫直の正本」とある。十行二十七丁。刊記なし。奥書は〔三十七〕。正本屋山本九兵衛刊のいわゆる山本版。イタミは多い。加賀掾正本「愛宕山旭峯」（八行四十四丁、山本九兵衛版）の異版か。『加賀掾段物集』三三三頁参照。

○おはん長右衛門

替表紙。替題簽。内題「万代曽我第二番目」おはん長右衛門。七行四十五丁。刊記なし。奥書に「豊竹肥前／豊竹東治」、「江戸長谷川町新道　松本屋万吉正本弘」とある。本作は天明元年七月十五日より江戸肥前座で「万代曽我二番目」として「おなつ清十郎」「お千代半兵衛」とともに三日替りに上演されたものの一つ。その「お千代半兵衛」の正本（凱香園文庫本）

奥書にこの三作を松本屋万吉・上総屋利兵衛で出版する予告があるが、本書は松本屋単独版。「正本弘」というのは浄瑠璃正本には珍しい書き方のようである。なお「お千代半兵衛」の正本には、後に大和屋吉兵衛・小堀屋源助が版元に加わった版もある（演劇博物館蔵）。

○新版腰越状

替表紙。替題簽。第一丁補写。内題「新版腰越状」、内題下に「竹本義太夫正本」（共に補写）。八行五十九丁。刊記なし。奥書は〔二十九〕。竹本筑後掾・近松門左衛門の署名ある山本九兵衛・山本九右衛門版である。『浄瑠璃稀本集』所収本は奥書にも「竹本義太夫」と署名のあるもの。『義太夫年表』では元禄八年二月十三日以前初演と推定。

○船軍凱陣兜

替表紙。替題簽。表紙見返しに口絵。内題「源氏の弓流平家の矢合船軍凱陣兜」。内題下に「義太夫章」。七行九十三丁。刊記「明和八年辛卯弥生吉日　作者　葉水／李卿」。奥書に「音曲けいこ本／おろし所／京都河原町通蛸薬師角銭屋西沢義右板」とある。読本浄瑠璃。『義太夫年表』明和八年の末尾に記された関大図書館本がこれである。

なお本文庫には「花飾三代記」があるが、これについては既に鶴見誠・横山正・内山美樹子氏の論考があるので、書名をあげるにとどめる。

凱香園文庫の調査に当っては、関西大学図書館、特に肥田皓三氏の好意ある御配慮に与った。また梶並暉一氏については、御遺族や岡山市のオリエント美術館長山本遺太郎氏ほかの方々から御教示を得た。記して御礼を申上げる。

（第四室　松崎　仁）